



挿図32 「和多見解説図」(貼紙図)(部分)(船杉力修(代表者)2009)

屋号は鶴屋であったが、貞享五年(一六八八)二月、「江戸ヨリ之御触之内二付、改門名ヲあたらしやと相改め申候」(「瀧川家公用控」)からすると、この絵図は、鶴屋の屋号が新屋に変わった直後に描かれたものと思われる。

この頃の松江藩は、延宝二年(一六七四)の大洪水以来、数度の自然災害に見舞われて凶作の年が続いた。貞享四年(一六八七)より五年間、士族の禄高を半減(半知)するなど、元禄の頃は家中の生活が最も逼迫(ひびく)していた(『松江市誌』一九四二)。御用商人たちは、藩への経済的な支援もさぞ多かったと推定される。

後年の「松江末次商家図」(明和七年「一七七〇」)では、他国商人の名前に代わって、大社・平田・荏原など宍道湖周辺の在郷出身と思われる人名が多くなっている。

(大矢幸雄)

図34 松江白潟町絵図「和多見町」(原図)

安永九年(一七八〇)頃

一五三・八×二三七・二

松江歴史館蔵

和多見の町は、東の売布神社と、西の大橋川沿いの水運の拠点(渡海場)に挟まれている。古くから町人たちの信仰の場であるとともに、十八世紀初め

頃より町人や船頭らの遊興の地として賑わったようだ。

本図(原図・最初の図)には、町人の居宅一二軒と借家四二五戸、屋敷内には一〇の土蔵とともに、井戸・納屋・便所・湯殿・竈(かまど)が記載されているなど、住人の生活状況がうかがえる。原図(最初の図)には一二九か所の貼紙があつて、それぞれに年代とともに所有者名や家屋の増改築、さらに後年の建て替えや借家人の変動なども記載されている。

裏書には、「絵図第六十三号、天保十二年丑八月、和多見町下絵図」とある。この町屋図は、天保十二年(一八四二)九月、町方によって戸数調査が行われ、その時、図面を差し出したとの記録(『松江湖漁場由来記』青砥可休)に一致するようである。

よつてこの絵図は、町肝煎(きまひら)・組合頭の町役人が小間割(町人の役)の分担、各町人の居住地を把握する目的で提出させたものと思われる。この絵図は、もともと白潟地区南方の古刹洞光寺に保管されていたのを、後に松江市に移管したといわれているが、詳細は不明である。

原図に書かれた居住者は、提出時期より約六〇年以上前にまで遡ることができる。白潟本町、天神町の貼紙には、安永九年(一七八〇)の記述がある。

町内は、居宅はわずか一二軒に対して、総戸数の九七割が借家であり、裏長屋が軒を連ねた庶民的な